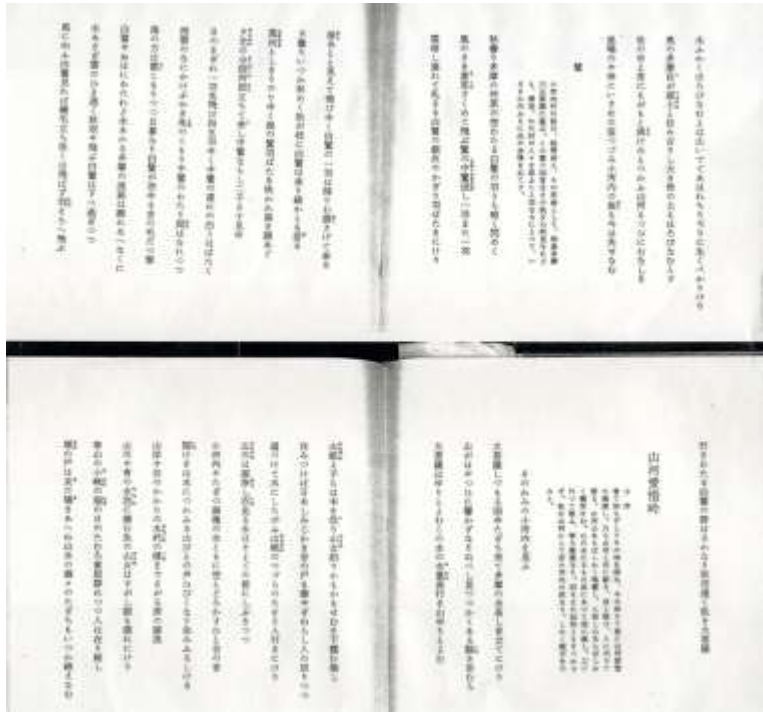


50 山河哀傷吟 鷺 北原白秋

文化



【推薦コメント】

北原白秋が玉翠園に吟遊された時に多摩川を詠ったものです。歳月を経ても変わることのない鷺の姿が温かなまなざしで、そして格調高く詠まれ、魅了しています。多摩川に訪れた北原白秋の足跡を後世に伝えていきたいと思います。

鷺

前書き

小河内行の前日、我等四人、その序曲として和泉多摩川玉翠園に遊ぶ。この鷺十四首はその秋夕の所見なれども、帰来、かの村の人々を思ふこと切なるによつて、いささか代ふるに此の余剰を以てす。

秋曇り多摩の河原の空わたる白鷺の羽うら暗く
閃めく
風のさき素首すくめて飛ぶ鷺の中鷺迅し一羽また一羽
雲暗し連れて乱るる白鷺の銀灰のかぎり羽ばたきにけり

【講評】

多摩川の姿を詠った北原白秋の歌です。ある秋の一日、しだいに日が暮れて薄暗くなっていくなかを白鷺が一羽また一羽と飛んでいく様子と、それを映す多摩川の水面が目浮かぶようです。多摩川は自然環境のみならず、文学的にも親しまれてきたようです。狛江のまちにとって「いいこと」であるとして選定しました。

受賞者：なし
推薦者：古山 英子 さん